



ふくりゅう

特定非営利活動法人

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成14年3月10日
通巻25号

「第6回下水文化研究発表会講演集」購読のお薦め

「なぜ?なぜ?なぜ?」日本の下水道がこれほど速く普及した理由について多くの外国人がよく質問します。戦後の日本の下水道事業推進のリーダー役であり、その業績によりストックホルム水賞も受賞された下水道総合研究所久保起理事長が我が国下水道の歴史的を振り返りつつ、その要因と視点について語られました。その内容が英語、日本語でおよそ60ページにわたる大論文として、集約されています。

また、最近、上下水道事業の民営化論議が盛んになってきました。外資系企業も日本やアジアを市場として進出の機会を狙っており、フランスからは維持管理に関するISO規格を制定する働きかけもなされています。このような動きの中で、今回は特に上下水道のマネジメントに関する分科会を設け、時宜に合った論文が提出され発表されております。

この他にも、外国における事例など貴重な論文が網羅されておりますので、本講演集は文献としても価値あるものです。是非ご購入をお奨めいたします。

【内容】

記念講演 1 「日本における下水道論の歴史的要因・視点及び最近の発展と21世紀への道」

久保 起 : 下水道総合研究所理事長

記念講演 2. 「2000年における水道と衛生に関する世界の現状報告と高まる日本への期待」

山村 尊房 : 国連大学高等研究所

記念講演 3. 「マレーシアにおける下水道事業の民営化の経験」

モハマド・リディアン・イスマイル : マレーシア住宅自治省下水道局次長

4分科会発表論文23編

頒 価 3000円(送料込み)

構 成 全237ページ

申し込みは本会事務所まで、必ず**FAX**、**はがき**、**e-mail**で。(連絡先は8ページ参照)

第25回定例研究会のお知らせ

本年度3回目の定例研究会を下記のとおり開催いたします。今回は、海外からの話題を2つ提供いたします。本会も昨年の研究発表会で海外からの記念講演ならびに研究発表があり、国際化の扉を少し開いたところです。とくに途上国における人と水とのかかわりや水文化を知り、これからの海外支援のあり方について考える機会になればと思います。講師のお二人は、専門は異なりますが、長く途上国との関わりを持ち続けてこられた方々です。

参加費は無料です。どなたでも参加できます。また、終了後懇親会を予定しています。

記

日時：平成14年3月29日(金)午後6時30分

(午後6時から受付)

会場：水道会館(日本水道協会7階会議室)

プログラム：

1. カトマンズの水・し尿・衛生

—文化人類学的視点から— (6:30~7:30)

ネパール・トリブヴァン大学客員教授 辻井清吾氏

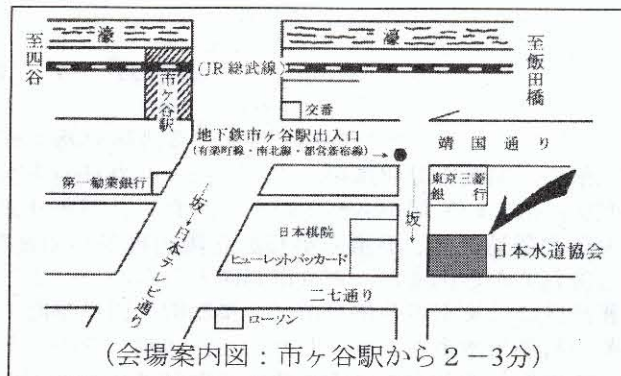
2. 発展途上国の水道の現状と問題点 (7:30~8:30)

海外環境エンジニアリング 与田博恭氏

【講演要旨】

講演1：ネパール国民は60余の多民族・言語から構成され、社会構造上、多岐の職業カースト社会からなる。その典型的な営みが今回の公衆衛生問題において重き役割を成している。今回、その一端を今日の課題として問題提起をしたい。

講演2：援助の基本に言及し、過去調査した国々の水道の現状を紹介するなかで、技術上、行政上の問題点を取り上げ、被援助国に望まれる援助のあり方について私見を述べる。



【講師紹介】

辻井清吾氏：1970年伊藤忠商事入社以来、ネパールに永く関係。1993年5月以降国立トリブヴァン大学客員教授として年1～2回の集中講義を担当中。所属学会は、国際開発学会、国際経済学会、アジア政経学会等

与田博恭氏：1972年日水コン入社後、国内水道（主に計画分野）に約10年間。1982年以降海外事業部に所属し、

インドネシア国ジャカルタ、ウジェンパンダン、タイ国バンコック、ラオス、タンザニア、セイシェル、トリニダードトバゴ等の発展途上国の水道プロジェクトに従事。1994年有限会社海外環境エンジニアリングを設立。ヨルダン国ザルカ、ケニア地方7都市、ホンジュラス国テグシガルパ市、東ティモール15都市、グアテマラ地方7都市等の水道プロジェクトに関与。

第14回 し尿研究会の定例会のお知らせ

し尿の海洋投棄は、昭和7、8年に始められ、平成11年3月に終了しました。当初、東京湾内への投棄と沿岸地域における赤痢の大発生、国を挙げての湾対策事業、投棄場所を湾の外にするにあたって行われたし尿の投棄に伴う漂着実験、投棄し尿の沈降の技術開発、砂町消化槽の陸上処理の終了とその波紋、そして海洋投棄の終焉。し尿の海洋投棄には、東京都のし尿処理の苦しみぬいた歴史が刻まれています。参加は自由です。

日時 平成14年3月30日(土) :18:00--20:30

題目 「東京のし尿の海洋投棄史と終焉」

講師 鈴木和雄氏(し尿研究会会員、元東京都清掃研究所、現在泌尿科学研究所主宰、医学博士)

場所 東京ボランティアセンター・市民活動センター

〒162-0823 新宿区神楽河岸1-1セントラルプラザ10階

TEL:3235□1171 飯田橋駅徒歩1分

多摩源流祭りへのお誘い

多摩源流の小菅村で例年通り多摩源流祭りが開催されます。多摩川源流には東京水道の水源林があります。水源林を育て、守った“山の御爺”中川金治については、昨年のバルトン忌での稲場教授の講演のテーマにも取り上げられ、多くの人たちに再び関心呼び起こしました。(ふくりゅう23号参照)

日本下水文化研究会では、以下の要領で多摩源流祭りへの参加者を募ります。今年のゴールデンウィークにはご家族おそろいで、日本一のお松炊き、真下から見る花火を堪能し、そして東京の水の源を訪ねてみませんか。参加は、会員・非会員を問いません。

記

日時：5月4日～5日(宿泊：小菅村・山水館)

予定：5月4日(多摩源流祭り：夕方からお松炊き、花火大会)

5月5日(多摩川源流水干までハイキング)

集合場所：5月4日10時 八王子駅北口タクシー乗り場

参加費：9,800円(子供7,800円)

なお、本会では、中川金治の顕彰、水を守るため上での森の大切さを広く認識してもらうため、この秋にイベントの開催を小菅村をはじめとする源流域の自治体に呼びかけています。その成功のためにも、この機会に多くの方に源流域への関心を深めていただけたらと思います。



オイシイ話

もう、6、7年も前になりましたでしょうか、豊島区立郷土資料館主催の「地域の歴史講座」で、「江戸と東京の下水道の歴史」について話をさせていただいたことがあります。現在の豊島区は、旧東京市15区と周辺郡部が昭和7年に合併してから出来た、東京市35区のうちの一つでした。豊島区には東京市合併以前に、巣鴨町・西巣鴨町・高田町の町別下水道がありましたので、当然、そのことについても触れましたところ、講座の参加者から、「大

東京市合併の計画がありながら、合併前の町ごとに、何故、下水道事業が進められていたのか」という質問を受けました。私が答えることができたのは「明治末期から大正期初期にかけて東京市が発展し、旧東京市15区の周辺地域に住宅地が拡大されて行くなかで、それぞれの町としても下水道建設を進めなければならぬ状況だったからではないか」ということだけでし

た。
それ以来、「東京市郊外下水道計画」について、キッチンと調べておきたいと思っておりましたが、適当な資料が入手できないままでおりました。

ところが、いま、私は東京都下水道局嘱託員として、当局に保管されている古い資料の整理をさせていただいておりますが、その資料の中に、「東京市郊外下水道計画の経路」という文書がありました。昭和2年ごろだったと思いますが計画の発案から、計画決定に至る昭和5年までの一連の流れを記した文書の「写」で、「東京市郊外下水道」の内容が細部にわたって知ることができる資料にめぐり会うことができました。

それと、つい先日ですが、日本で最初の下水処理場である「三河島汚水処分工場」の設計者といわれている米元晋一氏が、明治末期に海外出張をされ、欧米の下水道施設を視察した「復命書」(資料名は「下水道調査報告書」ですが)、そんな資料にも出会いました。

そのことを当会の会員である石井氏や地田氏に「こんな資料が出てきた」と話をしましたら、「ずいぶんオイシイ仕事をしてるんですね」と羨ましがられました。

当局の古い資料整理を始めてから、間もなく4年になろうとしておりますが、これまで資料の整理をしながら「関東大震災や第二次世界大戦を経て来た中で、よくこれだけの資料が残されていたものだ」と、先輩たちのご努力に感激はしてはしておりますが、自分が「オイシイ仕事」をしていると思ったことはありませんでした。言われてみて、「下水文化」から見ても、なるほど「オイシイ仕事をさせてもらっているのだなあ」と実感することができました。嘱託期間も余すところ、あと1年と少々ですが、「オイシイ仕事」を楽しませていただこうと思っております。

栗田 彰(本会運営委員)

第10回下水道博物館情報交流会議に参加して

平成14年1月30日、大阪府職員会館会議室で、第10回下水道博物館情報交流会議が開催され、下水道文化研究会の代表として出席させていただきました。

参加自治体は15団体中、札幌市、東京都、愛知県、名古屋市、滋賀県、大阪市、日本下水道事業団、日本下水道文化研究会と開催自治体の大阪府の9団体が出席し、各博物館の活動報告など、活発な情報交換が行われました。

本交流会議は当研究会の前稲場代表により提案され、研究会は当初より本会議の趣旨に賛同し、交流会議の活動を支援するため、会議の助成並びに参加してきました。

本年度の交流会議では、まず、大阪府下水道課長中本正明より挨拶の後、私が「下水文化を考える(2)」と題し「シルクロード水紀行」「これからの下水道財政を考える」の二議題について講演を行いました。その後自治体から各下水道博物館の活動状況が報告され、情報交換が行われました。

自治体によっては博物館が開設されてより長年が経過しており、そろそろ模様替え、改修の必要が生じているとの報告があり、今後、これらの博物館の改修手法、財源が問題となりそうです。また、博物館を建設する時点で、後の改修等維持管理も考えた、博物館の建設が必要ではないか、との意見もありました。入場者数は各博物館とも開設当初、多くの方が訪れていましたが、時間が立つに従い入場者が減少していく傾向にありました。

しかし、近年各博物館の関係者の努力と、地域へ定着したことから、徐々に再度増加し始めており、下水道博物館が各地で認知されてきているように思われます。

このことは、下水道博物館も次第に下水道のPRの場として定着し始めており、下水、水、水環境問題の住民との接点の場として貢献してきているように思われます。

しかしながら、近年下水道財政の厳しさから、新たに下水道博物館を建設する事が困難となっており、下水道博物館情報交流会議の会員が一向に増える傾向にないことは非常に残念であります。

下水道が完成に近づくに従い、下水に対する認識、水環境問題、下水道の利用方法に対して、住民が関心を持っていただくことが非常に重要であります。

これからは、下水道施設の建設だけでなく、博物館のようなソフト的な施設の建設に力を入れて行くべきではないかと考えます。

また、大阪府から「第3回世界水フォーラム」に関連し博物館会議が連携事業(プレ事業)として「第10回下水道博物館情報交流会議」を今年11月に大阪府、大阪市共催で再度大阪で開催したいとの提案がありました。そして、同時に、世界水フォーラムに協賛しシンポジウムを開催する案も事務局から提案され了承されました。また、日本下水道文化研究会に対しては、シンポジウムに対する協力依頼がありました。

具体的な案は未定ですが、日本下水道文化研究会としても今後、大阪府、大阪市と連携を取りながら協力していく必要があるものと思われれます。また、各博物館も世界水フォーラムに併せ、各種イベントを行うこととなりました。

最後に下水道文化研究会から、文化研究会が発行した図書(寄贈)と展示パネルの貸し出しをする旨の提案があり、各博物館で検討し文化研究会に申し込むこととなりました。

翌日は大阪府の寝屋川流域下水道鴻池処理場の「下水道ふれあいプラザ」「鴻池スカイランド」の見学を行い第10回下水道博物館情報交流会議を終了しました。

木村 淳弘(本会副代表)

シリーズ 東京のし尿処理の変遷(2)

第2期 「各種衛生的な処理の探求・その1」

東京下水道史探訪会¹

汚物清掃法と下水道法

明治政府は1900年に3月7日、伝染病の発生を予防するためには、先ず生活環境を保持する必要があるとの考えから、汚物清掃法と下水道法を公布した。汚物清掃法は土地の清掃を維持することを目的とし、塵芥、汚泥、雑排水、し尿をその対象とした。この法律により汚物の掃除が市民の義務となり、その処分が市の義務となった。ただし、し尿の農地還元が盛んに行われていたためし尿処分については掃除義務者である市民に委ねられた。

「下水道法」によって定義づけられた下水道の目的は単に土地の清潔を保持することとされ汚物のなかの雑排水のみに適用する特別法の性格を持っていた。当時の下水道は低湿地等の雨水や汚水（主に生活雑排水）を排除するための管渠施設にすぎなかった。雑排水は汚物なので本来は汚物掃除法の適用を受けるが公共下水道が敷設された地域には溝渠に関する汚物掃除法を適用しないこととしてあった。

当時は水質汚濁や富栄養化という現象は全く見られなかった。例えば諏訪湖の水も飲料適の許可を得て、厚い冬の氷は東京に出荷され、夏にかき氷に利用されたという。生活雑排水は側溝にでも流れるようにすれば自浄作用が働いて何の問題も生じなかった。

陸上処理へ

下水道施設での処理

現行の下水道法では水洗便所は、下水道に接続しなければならないが、当時はどうであったのだろうか。

バルトンの考え

バルトンが中心となってまとめた東京市下水道設計第一報告書は1889年7月6日市区改正委員会に提出され、審議の結果1890年11月7日先送りとなった。

- ・し尿は肥料として有価物であるので、従来からの汲み取りとし尿管に取り入れない。しかし水洗便所の将来的な普及を考慮する管渠とする。
- ・雨水は雑排水と混合させずに在来側溝を改良して河川等に放流させる。（分流式）
- ・地勢は平坦なのでポンプにより雑排水を排水する。
- ・処理区域の人口現在128万人であるが10年後の増加を考慮して150万人以上とする。
- ・雑排水は衛生上安全な距離に排出する。

- ・雑排水を荒川に放流する第2線については三河島にポンプ場を設け、砂ろ過法等を併設して処理する。
 - バルトンは東京市(1889年)、下関市(1893年)、仙台市(1893年)名古屋(1894年)広島市(1894年)の下水道計画案を策定した。広島市は合流式だが他は分流式で計画した。分流式を目指した理由は、
 - ・雨水は従来の排水路にまかせ、排水路のみを排除する管だけ敷設すれば、小さい管ですみ経済的である。
 - ・雑排水は衛生上、市街地から遠く離れた河川や海に放流する必要がある。合流式では、大きな断面の放流管を延々と敷設しなければならないので経済的でない。
 - ・合流式では、下水管の大きさに比べ展示の流量が極めて小さいので管内の汚水中の固形物が沈殿しやすい。
 - ・し尿は肥料としての有価物であり、農地に還元すればよい。
- つまりバルトンはこの時点ではし尿は肥料として下水には入れない予定であった。

「東京市下水道設計」と下水道による初めてのし尿処理

バルトンの計画を見直し東京市下水道設計を1907年に策定し、翌1908年に内閣の認可を得、1911年に工事着手した。この計画は合流式を採用し全市を地勢に応じて3つの地区に分割した。この計画は前回の計画と異なり合流式であった。この計画に基づき、三河島処理場（三河島汚水処分工場）を建設した。1922年3月26日に施設の一部が稼働し雨水、雑排水の処理を始めた。

7月にし尿を希釈し下水道放流を試した。雨水、雑排水の1/200以下のし尿を50倍に希釈し、幹線下水管に投入した。三河島汚水処分工場で沈渣の肥効性についての調査を実施した。また当時は便所から排出するし尿は当時は地方長官の指定する下水道以外の下水道以外には放流できなかった。

買い取り慣習に終止符

「大正7年は清掃業界の一大転機である。この時こそ永く記録に残すべき時である。」と「清掃事業300年・江戸から東京へ」に記述されている。

徳川時代から農民は野菜等と交換でし尿を汲み取っていたものが、正徳、享保の時代になりし尿代金を支払うようになっていた。大正7年のこの年から農民や業者は逆に市民各戸からし尿料金を貰うようになった。百八十度の逆転で徳川幕府以来の買い取り制度は完全に終止

符を打たれた。

1. 当時諸物価が値上がりし労賃の高騰したこと。
2. 下肥売上金額の低下で従来通り地主にし尿代金を払っていたのでは営業上の採算が合わないこと。
3. この頃は豊作が続き農民の生活が豊かになり、次第に生産が増してきた化学肥料利用に走り、取り扱い上手間のかかるし尿を敬遠したこと。

が原因になった。

しかし、し尿の収集は一日も休むことは出来ないので業界も非常に焦った。この為急速、大正7年4月上旬、本郷根津の金泉館で「東京糞尿肥料組合」は役員会を開き対策を協議した。参会者は200名に上り、会議は極度に緊迫した空気の中で行われたという。

「断固として円満安定と市民の衛生を守るため新局面を展開し、新たに市民から新たに特別の補助金を受けてこの難局を切り抜けるほかない。」という補助金要請の強行説と「いま直ちに過激に走ることに反対し一カ年延期を主張する」静観説が鋭く対立した。役員会はこのよ

うにして両論が対立し意志統一が出来なかった。

また市民から汲み取り料金の補助金交付を願い出る意見の同業有志51名は直ちに脱会を宣言し、このグループは神田衛生同業組合を結成した。早速各方面に了解を取り付けるため警視庁当局まで業界の窮状を訴え、当局は事情聴取のあと「其では慣例に従い地主から貰うことがよい」との回答を得た。しかし地主側は反対した。そこで再び当局に説明し様々の経緯を経て当局の回答は「各戸から貰へ」ということが本決まりなり、「一同は眼頭に涙を浮かべて喜び合った。」と記述してある。

(「清掃事業300年・江戸から東京へ」より)

この時定められた料金は1戸5人まで50銭、1人増すごとに10銭として許可が下りた。このようにして江戸以来の伝統のし尿の買い取り慣習から逆転した。

(続く)

¹本稿は東京都下水道局文化会機関紙「水声」に掲載した記事に加筆したものです。(地田修一、小松建司、石井明男)なお、参考文献は最終回に掲載します。

海外短信(1)

スリランカから死体を燐酸肥料に使ったという話

先日スリランカのキャンディ市に行ったとき、のごみ埋立地の入り口に、牛の頭、豚の頭、鶏の死骸がたくさん積んであったのを見て、かつて本で読んだ死体を燐酸肥料に使ったという話を思い出しました。埋立地の管理人に聞くと、やはり農家の人が買いに来るとのことでした。

記憶では、「・・・イギリス人たちは、ワーテルローの戦いや、クリミア戦争時代に、戦場で野ざらしにされた兵士の遺骨を集めて、船で運搬して燐酸肥料として利用していた。」というような内容が書かれていたと思います。すごいこともあるものだと強く印象に残ってましたが、似たようなことを目の前にして、妙な感動を覚えました。(石井明男)



海外短信(2) ネパール紀行

神々の座チョモランマ等地球の最高峰を見たいという夢を持ち続けてきましたが、AWCのネパール研修旅行(2月13日から4泊5日)に参加し、夢がかないました。

群青の空に浮かぶ神々の座の景観に圧倒されました。雪はチョモランマ山頂には認められません。強風が吹き飛ばしてしまったのでしょうか。下界は人間の努力の跡を刻んだ段々畑。森林は裸地の海に浮かぶ島のように。土壌浸食がかなり酷い。地球温暖化の悪影も出ています。

カトマンドゥもポカラもアフガンの街を思わせ、環境問題は深刻です。「土地の清潔」を謳った100年前の日本に酷似していると言えます。

宮田AWC会長の最初の言葉は、「生水は絶対飲まないこと」ネパールの人々は、自国の美しさを誇りにしているのに、何故こうなったのか。3月29日の定例研究会で辻井氏の講演を是非お聴き下さい。貴重な示唆が得られると思います。(稲場紀久雄)



シルクロード水紀行（1）

本会副代表 木村 淳弘

はじめに

私は1995年夏、中国新疆ウイグル自治区の首都ウルムチからカシュガルまで車で旅行しました。また、昨年の夏には、カシュガルから中国とパキスタンの国境であるクンジュラブ峠を越え、イスラマバードまでバスで旅行しました。

この紀行はその間、見た水に関する事項を紹介するものです。

カシュガルからイスラマバードまでの道はカラコルムハイウェイと呼ばれ、パミール高原を横断し、中国、インド、パキスタン間で領土紛争を行っているカシミール地方を横断する山岳道路です。アフガニスタンとも接していて、特に昨年9月の同時テロ事件からは、治安が悪化しており、現在では観光客は近寄れない状況にあるものと思われまます。私はその寸前に貴重な経験をさせていただきました。

このウルムチからイスラマバードまでのルートはシルクロードのルートに当たり、多くの遺跡があり興味深いものがあります。しかしこの区域は基本的には乾燥地帯であり、水紀行として話をするには適当ではないかもしれません。しかし、見てきた水に関することを述べてみたいと思います。

はじめのウルムチからカシュガルのルートは、タクラマカン砂漠の中の道であり、オアシスを結ぶように道が延びています。その距離は約1600キロにおよびます。

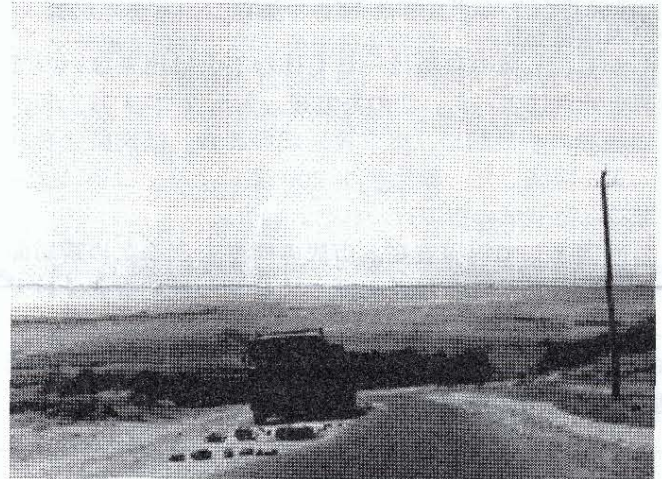
この区域のシルクロードは3本あったとされています。天山山脈の北を通る天山北路、南側を通る天山南路、タクラマカン砂漠の南側を通る西域南路であります。私が通ったのは天山南路にあたります。

世界で2番目に低い湖

まず自治区の首都ウルムチからトルファンにでます。トルファンは世界でも有数な雨の少ない地域として有名です。

この近くにアイディン湖があります。この湖は世界で2番目に標高の低い場所とされています。-154mだそうです。夏は非常に暑く、気温は50℃を上回り、地表温度は70℃を超えるそうです。このため夏は、水は蒸発してなくなり、塩を含んだ泥土地帯となります。緯度は北海道位ですが、内陸で標高が低いこともあって、夏は気温が高くなるようです。アメリカのデスバレー（標高約-86m）でも夏は40℃を超えます。私がアイディン湖を訪れた時も非常に蒸し暑く、すっかり体調を壊してしまいました。

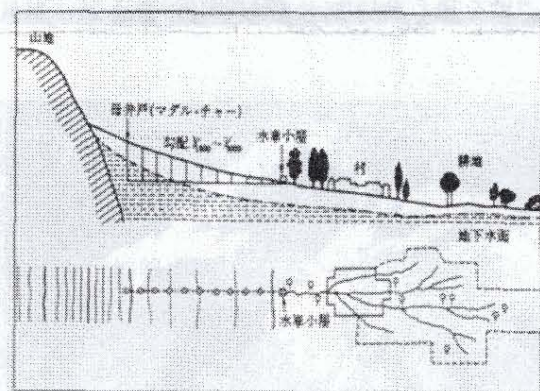
灌漑地下水道カレーズ



アイディン湖(干上がって見えない)

この地域からイラン地方にかけて、カレーズと言われる、用水施設が整備されています。これは、山岳地帯の地下水を数十キロの渡り、地下水道を掘りオアシスまで水を引く施設であります。オアシスに達すると地表面に現れ、オアシス一帯を灌漑し、砂漠の中に消えていきます。

トルファンで施設を見せてもらいました。直径1.3から1.4mぐらいの素堀の水路が地下に延々と続いています。そして、約30m間隔で崩れた土砂を取り出す素堀のマンホールが設けられています。これらのマンホールは長年に渡り、土砂を搬出してきたため、蟻塚の様に盛り上がっています。

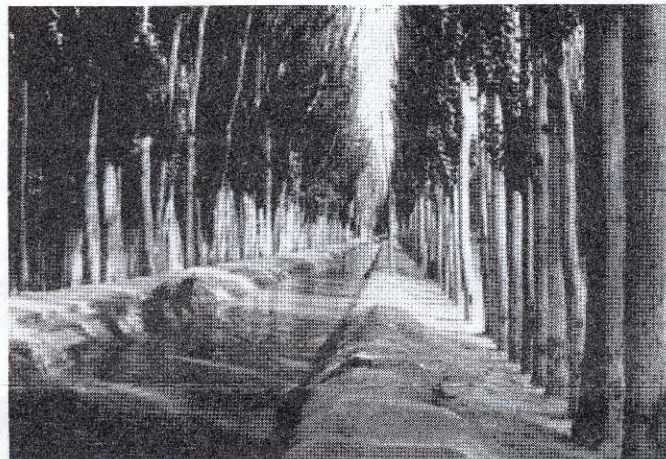


カレーズ

カレーズはいつ頃から造られたかは分かりませんが、シルクロードのオアシスはこの様な灌漑施設で生活を維持しており、数千年に渡り維持されてきたものと考えられます。シルクロードのオアシスの大部分は、我々が考え

ているような、湧き水のオアシスではなく、長年、渇水と戦いながら、灌漑施設を造り、維持してきたものであります。

砂漠の中に延々と一直線に並んでいるカレーズの蟻

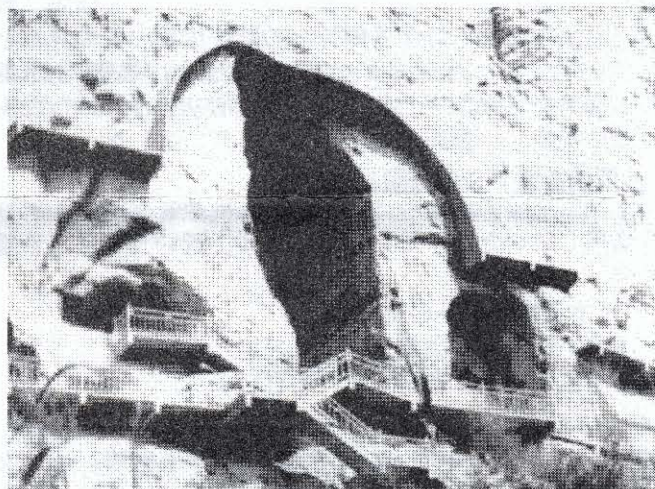


街路樹の灌漑

塚の様なマンホールを見ると、人間の力の偉大さを感じさせられます。しかし、現在では、水道に代わりつつあり、次第に使われなく成っているようです。

天然のオアシス

トルファンからカシュガルの中に、キジルと言うオアシスがあります。ここにはキジル千仏洞と呼ばれる、4世紀から5世紀にかけて造られた石窟洞が多数あります。ここには泉があり、今でも水が湧き出ています。



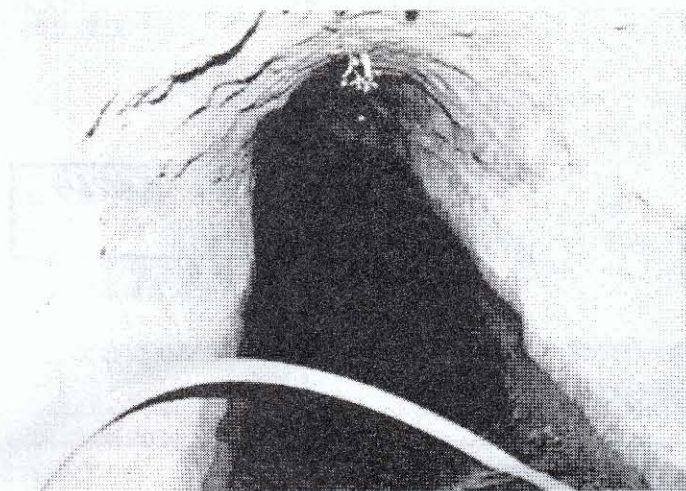
キジル千年洞

非常に不思議な光景であります。周辺は砂漠地帯で、水は一切なく、乾燥した岩と砂ばかりの地形であります。湧き出している岩も周辺は完全に乾燥しています。

なぜ、水が湧き出るのが不思議に思われます。

しかし、千仏洞が造られてより、延々と千年を超える間、枯れることなく水が湧きだしていたのです。

(続く)



地下水道

図書の紹介 (本会にかかわりの深い本を紹介します。)

■『空と海と大地をつなぐ雨の事典』レインドロップス編著

「雨水利用を進める市民の会」が構想4年、総力をあげてこられた集大成が完成しました。日本下水道文化研究会のメンバーも執筆に参加しています。気象現象としての雨、歌の歌詞や文芸のなかの雨、そして雨とのかかわりのなかで育まれた生活文化、日本だけでなく広く世界中から題材が集められています。まさに雨のすべてが集められた読み物です。雨を遠ざけることに主眼をおいてきた下水道から転換し、雨と楽しくつき合い、新たな環境を創造していこうという考えをお持ちの方は是非、座右に置いてほしいと思います。

(北斗出版・2500円)

■『水辺ぐらしの環境学』嘉田由紀子著

水辺は、人と水との接点です。気候・風土に応じさまざまな関わり方があります。この本には、琵琶湖に始まり、中国、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカの湖周辺の生活のありさまが比較されています。人と水との新たなかかわりを考えていこうということは、日本下水道文化研究会の設立主旨にもありますが、地球をめぐる水を考える礎に足元での人と水との関わりから学ばなければならないことは少なくありません。

(昭和田・2800円)



運営委員会・事務局より

(1) 在庫図書の有効利用について：予てから本会発行図書の在庫については、事務所をお借りしているNJS様のご好意により資料室のスペースに「仮置き」させていただいておりましたが、貴重な図書をより有効に活かすため、いくつかの取り組みを進めていこうと思っております。

■ 「小流通書籍販売書店での委託販売」

森田・地田両運営委員のご尽力で地方小出版書籍を扱う「アクセス」(千代田区神田神保町1-15・すずらん通り三省堂の近く)という書店で、1セットを店舗に置き、もう1セットは図書館等への販売活動の際の見本として使用することが決まりました。また、建築・土木関係の図書を目録販売している「港や書店」(神保町)でも目録に掲載し、委託販売に応じてもらいました。

■ 「機関誌著者への寄贈」

定例研究会の講演者にまとまった部数を寄贈し、有効に活用していただきたいと思っております。近いうちにご希望を伺うつもりです。

■ 「下水道博物館への寄贈」

本会が情報交流会議を支援している全国の下水道博物館へ希望があれば寄贈したいと思っております。

そのほか、お世話になっている賛助会員へのセットでの寄贈、下水道を専門とする大学教員への寄贈、下水文

会費納入のお願い：すでにご案内させていただいておりますが、13年度の未納会費を請求させていただきます。未納の方は、早期の納入よろしくお願いいたします。本会の事業は皆様からの会費で運営されています。なお、4月から銀行振り込み先名称が以下のようになります。

- 金融機関 みずほ銀行 (←富士銀行)
東京中央支店東京都庁出張所 (←本店東京都庁出張所)
- 店番号・口座番号 777 (普通) 2323883 (変更なし)
- 講座名義 特定非営利活動法人日本下水文化研究会

編集後記：今年度は、5回のふくりゅうを発行することができました。しかも今回は、8ページと盛りだくさん。これも原稿をお寄せいただいた方々のおかげと感謝申し上げます。もう少しで隔月発行ということになりますが、まだまだ定期発行は難しそうです。欲を言えば足りませんが、いつもこの下欄で書いているお願いに答えていただき、バラエティにとんだ執筆者からの寄稿が集まってもらいたいと願っています。▶今号では2つの海外短信、木村副代表のシルクロード水紀行(連載第1回)、そして海外の話題が提供される定例研究会のお知らせ、というように海外志向が現れてきています。次年度は、海外水文化分科会の立ち上げということになるかもしれません。▶2003年は今年度の湖沼会議に続き、再び関西で世界水フォーラムが開催されます。本会もいくつかの企画に参加していくつもりで、次年度の企画を練っていこうと思っております。

(酒井彰)

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

化普及・啓発のための講演会を企画し販売するなどの案も出されています。会員の皆様も、良いお考えがあればどしどしご提案ください。

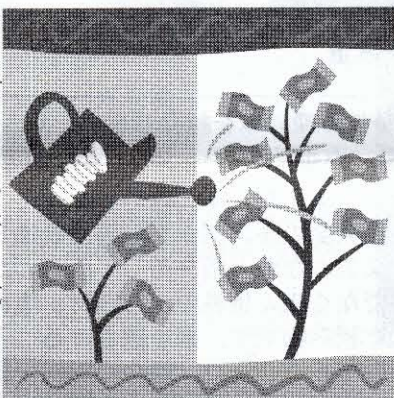
(2) 会員名簿について：今年度作成することになっております会員名簿に関しましては、会員の皆様から情報をいただいていたから1年ほどたってしまいましたが、現在鋭意作成中です。その後異動等がございましたら至急ご連絡願います。

(3) 機関誌の発行遅延のお詫び：機関誌の発行時期が大幅に遅れてしまいました。これは、昨年の湖沼会議・自由会議の準備に追われたためですが、深くお詫びいたします。なかには原稿をいただいていたから1年半以上お待たせしてしまっている原稿もあります。ようやく本会報とともにお送りすることができました。お忙しいなか、原稿作成や急な原稿の校正をお願いした講演者の方々、いつものように楽しい表紙を書いていただいた彦根大助様、編集にご協力いただいた多くの方々へ感謝申し上げます。ボリュームの方は、12号を再び上回ってしまいました。資料的な価値として残せた半面、読み物としては、少し冗長じゃないかのご批判もあろうかと思っております。忌憚のないご意見を伺えれば幸いです。

ふくりゅう 通巻25号

主な目次：

研究発表会講演集購読のお奨め 第25回定例研究会のお知らせ	1
源流まつりへのお誘い オイシイ仕事	2
第10回下水道博物館 交流会議へ参加して	3
シリーズ 東京のし尿 処理の変遷(2)	4
海外短信	5
シルクロード水紀行 (1)	6



特定非営利活動法人
日本下水文化研究会
〒162-0067 新宿区富久町6-5
NJS富久ビル別館3F

TEL & FAX 03-5363-1129
jade@jca.apc.org
aan63630@syd.odn.ne.jp

ホームページもご覧ください。

<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>